英雄の読まれ方

── 小説『鉄道遊撃隊』の受容 ──

中　野　　徹

はじめに

スラブ・ユーラシア文化研究会では、中国 1950 年代に発表された小説『鉄道遊撃隊』の受容について発表する機会をいただいた。簡単ではあるが、発表の概要の報告とその補足をこの場を借りて行ないたい。

1949 年の中華人民共和国成立から 1966 年の文化大革命勃発までの十七年間に生み出された中国の文学・芸術作品は、社会主義中国を賛美し、中国共産党による革命の歴史を描いたものがほとんどであり、濃厚な政治性を有することが最大の特徴である。日本では、それらは、千篇一律のプロパガンダ小説とみなされ、研究対象として取り上げられることはほとんどなかった。

発表で取り上げた『鉄道遊撃隊』は、日本では翻訳はあるものの、ほとんど知られていない作品である [(1)]。しかしながら、中国においてたいへんな人気を誇る作品である。この作品は小説刊行された後、映画、連環画、京劇など、さまざまな形式に改編されており、それらの改編作が繰り返し上映、再版、上演されることにより、『鉄道遊撃隊』という物語は、さらに多くの享受者を獲得してきた。1980 年代以降も、テレビドラマの改編作や映画が作られ、2005 年にはワイヤーアクションを駆使したテレビドラマが放映され、高い視聴率を収めている。

近年の『鉄道遊撃隊』の改編作の制作年をみると、映画「飛虎隊」が 1995 年、テレビドラマ「鉄道遊撃隊」が 2005 年であり、両作品の製作年はそれぞれ、中国からみれば抗日戦争（日中戦争）勝利 50 周年、60 周年の年にあたる。中国において、メモリアルな年に抗日戦争を描く作品が繰り返し制作されることにより、愛国主義を呼び起こすと同時に、反日感情を生み出す装置として、この物語は機能していると考えられるかもしれない。鉄道に飛び乗って、日本軍を撃ち殺していくという『鉄道遊撃隊』に材を取ったと思われる携帯電話のゲームも存在する。しかしながら、『鉄道遊撃隊』をはじめ、社会主義体制下の文学・芸術に関する政策を色濃く反映している作品群を、中国共産党のプロパガンダ小説だと決めつけてしまうのは単純にすぎるのではなかろうか。

中国では、1988 年の陳思和・王暁明らの「20 世紀中国文学の書き直し」に関する議論以来、中華人民共和国成立から 17 年の間に大量に生み出された文学・芸術作品に対する再評価が始まっている。この時期の小説を検証するために、これらの作品が中国の人々にどのように受容されていたのかを丹念に見てゆくことは重要なことと思われる。中国の 1950、60 年代

1　井上隆一訳『鉄道遊撃隊』大東出版センター、1972 年（のちに龍渓書舎、1980 年）。

『鉄道遊撃隊』書影
（上海人民出版社、1977 年）

の作品を分析するために、『鉄道遊撃隊』という作品を例にして、改編作における英雄の描かれ方をみてゆきたい。

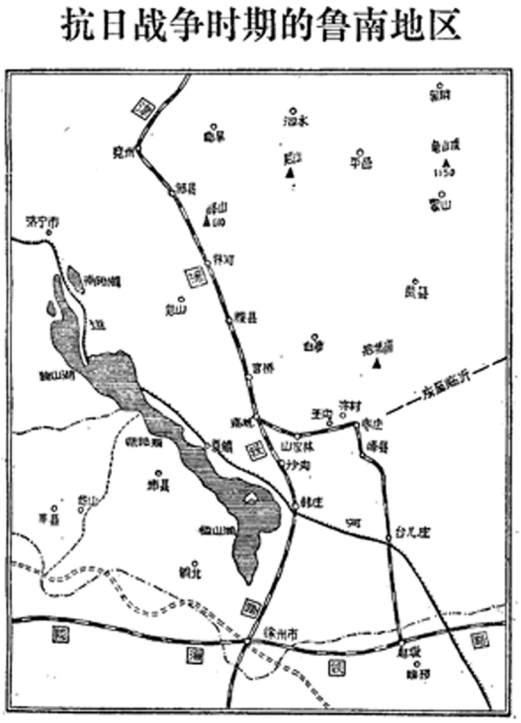
小説『鉄道遊撃隊』

まずは、小説『鉄道遊撃隊』について説明したい。『鉄道遊撃隊』は、知侠（1918-1991）が、日中戦争時期の山東省南部に実在した魯南鉄道大隊というゲリラ部隊の活躍を、自らの取材をもとに小説化した、長編小説である。1954 年、上海新文芸出版社から刊行された。

その内容は、抗日根拠地から山東省棗荘に派遣された共産党の地下工作員の劉洪が、炭鉱労働者や鉄道労働者を集めて部隊を作り、走り来る鉄道に飛び乗る〈扒車（パアチャー）〉という特技を駆使し、日本軍の輸送物資を奪い、機関車を乗っ取って爆破させるなど、抗日根拠地の部隊の活動と呼応して繰り広げる抗日活動を描いたものである。

物語は、山東省南部のまち棗荘と、天津と南京郊外の浦口を結ぶ鉄道の幹線津浦線沿線を中心に展開する。棗荘には山東省最大の炭坑嶧県炭田があり、津浦線の臨城から嶧県までは支線がひかれている。津浦線は、天津―嶧県の北段がドイツ、嶧県―浦口の南段がイギリスによって敷設された。帝国主義列強が敷設した鉄道を利用して、貴重な資源である石炭が、日本軍により次々に持ち去られていく。機関車という鉄の固まりに飛び乗るゲリラ隊たちの活躍は、中国共産党の戦いを象徴しているともいえるだろう。

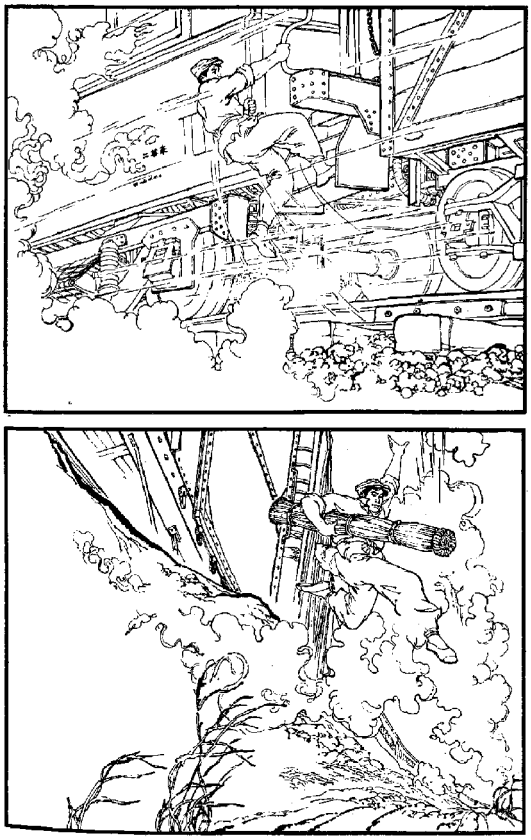
小説『鉄道遊撃隊』は、現在にいたるまで、その総発行部数は 300 万冊を越え、多くの読者を獲得してきた作品である。ただし、この物語の普及は、小説だけによるものではなく、他媒体への改編作が大きく影響したと考えられる。次に、この小説の、図像化、映像化の例を順にみていきたい。



鉄道遊撃隊関連地図
（『鉄道遊撃隊』上海人民出版社、1977 年）

連環画『鉄道遊撃隊』

連環画と呼ばれる手のひらサイズの小冊子がある。それは一ページ一コマの絵物語であるが、中華人民共和国成立後、政策の普及や模範的人物の紹介、さらには文学作品の普及のために、おびただしい数が出版された。『鉄道遊撃隊』も連環画に改編されている。なかでも1955年から62年にかけて、全10冊の連環画は、上海人民美術出版社から刊行されている。董子畏改編、丁斌曽・韓和平絵画の三人によって手がけられた連環画は、一冊あたりの発行数が三百万冊を越している。連環画は貸し本屋で回し読みされており、実際の発行部数より多くの読者を獲得したであろうことや連環画がもつ視覚的効果を考えると、物語の普及という点では、その影響力は小説より大きいといえるだろう。丁と韓の二人は、物語の舞台である山東省南部に何度も足を運び、取材を重ね、七年の歳月をかけて連環画を完成させた。1963年に行われた全国連環画表彰大会では、脚本が二等賞、絵画が一等賞を受賞するなど、その芸術性も高く評価されている。



連環画『鉄道遊撃隊』第二冊
「飛車奪槍」（上海美術出版社、1978）

映画『鉄道遊撃隊』

映画『鉄道遊撃隊』は、1956年、上海電影製片廠で製作された趙明監督の作品である。脚本は小説の原作者劉知侠が担当し、鉄道遊撃隊のモデルとなった魯南鉄道大隊の元隊長である劉金山が軍事顧問を務めている。列車に飛び乗るシーンや微山湖の風景が印象的である。しかし、全二十八章の長編小説を約90分の映画に改編したためか、展開が速すぎ、原作の知識なしには登場人物の性格がわかりづらいように感じる。

『鉄道遊撃隊』の隊員小坡が弾き語る「愛する琵琶をつま弾いて」〈弾起我心愛的土琵琶〉（呂其明作曲）は、映画の挿入歌として大変な人気を博した。80年代以降の映像作品においても、この挿入曲はくりかえし使われており、いまや『鉄道遊撃隊』のテーマソングともいうべき歌になっている。

近年の映画作品に、映画『鉄道遊撃隊』は引用されている。日本でも2005年に公開された『電

映画『鉄道遊撃隊』
挿入歌「愛する琵琶をつま弾いて」

影往事』（小江監督、邦題『玲玲の電影日記』）である。中国版ニューシネマパラダイスと呼ばれる中国映画はいくつかあるが、『電影往事』そのひとつに数えられる作品である。

映画をこよなく愛する少女の回想を通して、激動の時代を生きる母と娘の愛情と葛藤を描くこの映画において重要な働きをするのが、1960、70年代の中国における庶民の娯楽であった、野外での映画上映である。人々は野外でかかる映画を心待ちにしており、映画『鉄道遊撃隊』はとくに人気の作品として描かれている。『電影往事』のなかでは、『鉄道遊撃隊』のアクションシーンに魅了された少年たちが、日本鬼子（日本軍の蔑称）をやっつける遊びに興じ、『鉄道遊撃隊』の“飛び乗り”〈扒車〉をまねて汽車に飛び乗ろうとする少年が描かれている。中国において、文革時代に少年時代を過ごした人たちのなかには、映画の中の日本人をまねて遊ぶ「鬼子ごっこ」をした人も大勢いたという[2]。

映画『電影往事』における映画『鉄道遊撃隊』は、登場人物の思い出として引用されている。そこには1960、70年代を生きた観客のノスタルジーをかき立てる製作者側の意図を読み取ることができる。映画『鉄道遊撃隊』は、当時の大多数の人々に親しまれていたからこそ引用されるのである。映画『鉄道遊撃隊』に描かれるゲリラ隊員たちは、少年たちのヒーローであったといえるだろう。

『鉄道遊撃隊』の享受者たち

さて、ここで、改編作から少し離れて、小説『鉄道遊撃隊』の読者たちを見てみたいと思う。小説『鉄道遊撃隊』は、発売とともに大量の問い合わせが出版社に寄せられた。その質問の趣旨は、作中の登場人物は実在し、本当の出来事を描いたものであるのか、というものであったという[3]。その反響を受けてか、魯南鉄道大隊の隊員たちは、その後、抗日戦争の歴史の語り部として、中国全土をまわっている。作中の登場人物を実在の人物と重ね合わせる視点が、読者の反応のひとつとしてあげられる。

いまひとつ読者の反応を見てみたい。

王衡「学徒」
（略）小馬はとても聞き分けがよく、ただ何冊かの本を買っただけでした。その中には『鉄道遊

2　応雄「中国映画の中の日本人像」『饕餮』第8号、中国人文学会、2000年。
3　知侠「後記」『鉄道遊撃隊』上海新文芸出版社、1955年、普及版。

撃隊』という本がありました。昼間、かれは一生懸命働き、昼になっても休まないこともありました。師匠と経理はよくかれに命令して、無理に休ませようとするほどでした。夜、仕事着を脱ぐと、かれはまたよくとおる声で李正や劉洪が洋行を襲撃し、汽車を襲撃する物語を読み始めるのです。年配の従業員たちは耳をすまして聞き、口々に彼を褒めて言います。「おれたちの小馬がきてから、宿舎までにぎやかになったなあ。」(4)

この文章は、中国共産党中央委員会の機関紙『人民日報』に掲載されたものである。中国におけるもっとも権威のある新聞であるが、それゆえにある種のバイアスがかかったものとして、そこに載せられる記事の人物像はある程度割り引いて見なければならないだろう。しかし、公的な新聞に、政治委員の李正と隊長の劉洪による抗日活動を描いた『鉄道遊撃隊』に関する記事が掲載されていることは、少なくとも、この時期にあって、同作品がまじめで熱心な学生や労働者が読むべき読み物として認められていたことがわかる。

映画や新聞記事からは、男の子にとって、『鉄道遊撃隊』という物語は、血湧き肉躍る読み物であり、そこに描かれる隊員たちは、あこがれの“英雄”という輝ける存在であったことが読み取れるのである。

少年たちが、遊撃隊員たちの活躍に胸躍らせ、鬼子(ゲイズ)をやっつける遊びに興じていたとするならば、少女たちはどのように『鉄道遊撃隊』という物語をみていたのだろうか。『鉄道遊撃隊』を読んだ、ある少女の日記を見てみたい。

1966年7月28日木曜日

わたしは『鉄道遊撃隊』という本を読み終えた。勇ましく粘り強く戦い抜くかれらの闘志には感動させられたけど、わたしはいくつかの問題があまり正しく描かれていないと思った。たとえば、「彼女〔芳林嫂――日本軍に夫を殺され、鉄道遊撃隊の抗日活動に協力する未亡人〕は、敵が彼女を捕まえると彼女を殺すだろうとわかっていたので、敵の目の前で哀れな姿を装い、鬼子の哀れみを乞おうとは考えもしなかった。」それなら、もし敵が彼女を殺さなかったら？　彼女はそれでも持ちこたえられたのだろうか。また「戦いのなかで、劉洪は堅きこと鋼鉄のごとき英雄であったが、いま鳳児（芳林嫂の娘）に対するこまやかで行き届いた世話は愛情にあふれていた。」これはいったい何を言いたいのだろう？　しかも本では、同志を一人迎えるごとに酒宴を開いている。いい人を描くときも〔遊撃隊の隊員たちは〕、きまって口汚く罵っている。“畜生”〈奶奶个熊〉“うすのろ”〈熊种〉“犯しちまうぞ”〈入他奶奶〉とか、なんなのだろう。ほかにも“意気地がねえ”〈孬种〉“肝っ玉がある”〈有种〉や“友達甲斐がある”〈够朋友〉とかがたくさん出てくる。(5)

日記の書き手は現在、北京で雑誌数誌の編集に携わっている人物である。日記には、1950、60年代の他の文学・芸術作品に意見を残しているところから、文学少女であったことが窺える。彼女は、『鉄道遊撃隊』の物語に一定の評価こそ与えてはいるものの、小説中の説明的な描写に対し、率直な不満を述べている。さらに、抗日戦争のさなかに酒宴を繰り返

4　王衝「学徒」『人民日報』1963年1月12日。
5　張新蚕『紅色少女日記：一箇女紅衛兵的心霊軌跡』中国社会科学出版社、2003年、49-50頁。

し開く遊撃隊たちや荒々しい言葉遣いに垣間見られる粗暴な一面に疑問を投げ掛けている。

21 世紀になって公刊されたとはいえ、日記という本来は私的であるはずの領域に『鉄道遊撃隊』への不満が書き込まれている。文革期の文学・芸術の創作における人物形象である“三突出”[6] に代表されるように、当時の文芸作品はしだいに完全無欠の超人が登場するようになるのだが、少女が感じた“英雄”たちのなかに感じた、英雄らしからぬ不純な部分はどこからきているのだろうか。

ルポルタージュから小説へ

ここでは紙幅の関係上、『鉄道遊撃隊』の登場人物を詳しく検証することはできないが、その考察の一助として、小説ができるまでの過程を整理しておきたい[7]。知侠は、小説『鉄道遊撃隊』執筆の前に、1945 年に「鉄道隊」、47 年に「李政委和他的部下」（李政治委員とかれの部下）という二篇のルポルタージュを書いている[8]。この二篇はともに未完ではあるが、知侠はこれら作品をもとに、小説『鉄道遊撃隊』を執筆している。

筆者は以前に『鉄道遊撃隊』の小説化の過程を考察し、物語の変容について以下の点を指摘した。この小説以前のテキストには、隊員たちの活動には、抗日活動という大義名分は描かれない。列車強盗をなりわいとしているような、喧嘩や酒、博打に興じる隊員たちの粗暴な一面が描かれるだけである。しかし、小説では暴力や性に関する描写はほとんどなくなり、隊員たちの“立ち後れた”一面が影を潜める。これにより、鉄道襲撃は、荒くれ者たちの生計としての石炭泥棒から、明確な意志をもった抗日活動へ読み替えられたこと[9]。さらに隊員内部のあつれきやある人物がのちに“寝返った”ために、小説化される際に意識的に描かれなくなった人物がいること[10]、である。

ルポルタージュから小説へ、実在のゲリラ部隊の魯南鉄道大隊への取材をもとにした、知侠の手になる物語は以下のように変遷する。「鉄道隊」は、“戦闘英雄”徐広田への取材をもとに描かれた徐広田という人物の物語であったが、「李政治委員和他的部下」は、魯南鉄道大隊の隊員への取材にもとづき、隊員数名の物語へと変化する。それらをもとに執筆された小説『鉄道遊撃隊』は、実在の人物への取材をもとにさらに脚色が施され、大隊長劉洪と政治委員李正を中心とするゲリラ部隊の戦いの軌跡を描く長編小説へと変化するのである。

小説化にあたり、知侠が用いた手法は、何人かのモデルとなる人物数名をあわせて一人の人物像をつくりあげてゆく、“典型化”と呼ばれるものである。たとえば、実在の魯南鉄道大

---

6 三突出とは、江青らによって提唱された文学・芸術の創作における人物形象を規定したもの。登場人物のうち、肯定的人物を“突出”させ、その中でも英雄的人物をさらに“突出”させ、英雄的人物のうちさらに主要な英雄的人物を“突出”させるというもの。

7 「『鉄道遊撃隊』論：ルポルタージュから小説へ」『饕餮』第 12 号、中国人文学会、2004 年。

8 知侠「鉄道隊」『山東文化』第 2 巻第 3-4 期、1945 年）；劉知侠「李政委和他的部下」『山東文化』第 4 巻第 5 期、1947 年。

9 拙稿「描かれない暗部：鉄道遊撃隊物語において消えた暴力、性」『野草』第 77 号、中国文芸研究会、2005 年。

10 前掲「『鉄道遊撃隊』論：ルポルタージュから小説へ」。

隊の大隊長には、前後して、洪振海と劉金山という二人の人物がいたが、小説『鉄道遊撃隊』のなかの鉄道遊撃隊隊長は劉洪一人だけである。劉洪は、その名が洪振海と劉金山から一字ずつとられているように、二人の人物の性格を反映した人物となっている。また、政治委員の李正も、杜季偉という実在の人物の他、数名をあわせて作られた人物であるという[11]。

さて、魯南鉄道大隊の活動の歴史をまとめた史料によれば、劉洪のモデルの一人とされる洪振海は、抗日活動のさなか、戦況を見誤り戦死したとされ、死後、共産党員として入党が認められたという[12]。洪の死後、後任の劉金山が大隊長に就任している[13]。ところが小説では大隊長劉洪は、はじめから共産党員として描かれ、かれは死ぬことはない。小説の第21章では、劉洪は不利な情況にもかかわらず戦いつづけたために、日本軍に包囲されてしまう。部隊が全滅の危機にさらされたとき、政治委員の李正が現れ、劉洪に撤退を促す。しかし劉洪はなおも戦いつづけ、そのために李正は撃たれ負傷してしまう。はっと我に帰った劉洪に李正はこう命令する。「共産党の命令だ。撤退するんだ。」そこで劉洪はようやく撤退を命じ、鉄道遊撃隊は全滅の危機を免れる。

小説『鉄道遊撃隊』のなかで、共産党の政治委員は、“兄弟”と呼び合う疑似血縁共同体に所属する荒くれ者たちに、“同志”と呼びかける。“同志”と呼びかけられた者たちは、政治的に目覚め、抗日戦争を戦いぬく思想共同体の一員として回収されていく。この第21章においても、李正が負傷し、まさに身をもって呼びかけることにより、怒りで我を忘れて蛮勇をふるい規律から逸脱しかけた男は冷静な共産党ゲリラの隊長に立ち戻るのである。

小説の劉洪は、勇猛果敢な一面を洪振海から受け継ぎ、政治的な判断力をもつ隊長としての資質は劉金山から受け継いでいる。しかしながら、“典型化”は全編を通して成功しているわけではない。主人公の劉洪は、すぐに怒り、口をひらけば罵るという荒々しい気性をもちながら、一方では冷静沈着な面をも有している。また、李正の人物像は、1950年代の文芸批評家から「彼の存在はもっぱらみんなに正論を話すためだけにあるようだ[14]」と批判されている。“典型化”という処理により、数名の人物をまとめた際に、複数の性格を有する人物や完成されすぎて人間味を失った人物が生まれているのである。

読者は作中の登場人物に実在のモデルの姿を見いだそうとするが、作中の登場人物は、実在の人物に“典型化”という処理を施され純化されたものである。ただし、小説のなかには、李正が必死に教化しても“悪弊”が改まらない隊員たちが存在する。汚い言葉遣いの隊員たちの描写は、実在のモデルたちの雰囲気を残す、物語が回収しきれない姿と言えるのかもしれない。

結びにかえて

『鉄道遊撃隊』の物語は、遊撃隊たちの、“飛び乗り”という特技により津浦線を襲撃し、

---

11 知侠「『鉄道遊撃隊』創作経過」『新文学史料』1987年第1期。
12 中共棗荘市委党史辦公室編『魯南鉄道大隊紀実』中共党史出版社、1992年。
13 同上。
14 招明（王西彦）「評『鉄道遊撃隊』」『文芸月報』1954年5月号。

日本人と戦う伝奇的色彩を帯びた物語であるとともに、政治委員の李正が、思想的に“立ち後れた”隊員たちをいかにして指導し共産主義戦士へと成長させ、その指導のもと、山東省南部の民衆を革命に積極的に加わる力に変えてゆくかを描いた物語であると捉えることができる。この作品は、剣を銃に持ち替えた武侠小説的性格と一種の“教養小説”的な性格を備えているのである。少年たちがあこがれた“英雄”としての姿は、この武侠小説の要素によるものであろう。

小説の作者である知侠は、ある必要に迫られて、粗削りなところがある人物たちを描くために、“典型化”という手法を用いた。しかしながら、政治委員が教え導くはずの隊員たちがはじめから自覚的な人物になってしまったために、小説における人物の成長の幅は減ってしまった。これにより、物語の魅力も少し減ることになる。だが、“教養小説”的な部分に回収されない部分は、『鉄道遊撃隊』という物語に見られる、同時期の他の小説群とは違う魅力でもあるのだ。

勇猛果敢な英雄の一面的な人物像という欠点は、『鉄道遊撃隊』に限らず、1950、60年代の中国の文学・芸術作品に多くみられる。しかし、これらの小説が本来的にもつ欠点が、近年、あるブームを生んでいる。

ここ数年、中国では“紅色経典”と呼ばれる作品がさかんにテレビドラマに改編されている。“紅色経典”とは、1990年代なかばから、統一された定義付けがなされないまま一般的に用いられている語であるが、王春艶によれば、狭義の“紅色経典”は、中華人民共和国成立した1949年から、文化大革命が起きた1966年までの17年間に作られた文学・芸術芸作品を指し、文革中の模範劇と呼ばれる現代革命京劇をも含むという[15]。この語は、一説によると、古い革命の歌の販売促進という商業的戦略から編み出された語であったが、いつの間にか、1950、60年代に大量に生み出された作品を指すようになったという[16]。『鉄道遊撃隊』も“紅色経典”のひとつとされている。

“紅色経典”は、中国の革命を題材とした作品であるにもかかわらず、近年の改編ブームの背景には、商業主義的なねらいが見え隠れする。“紅色経典”は、ある世代から見れば、思い出の作品ばかりであるため、製作側は宣伝費をかけずとも注目を集めることができる。しかも、その物語の登場人物は一面的な性格をもつものであり、人物像には手を加える余地がある。いわば、非常に好都合な題材であるのだ。

しかし“紅色経典”の改編は、さまざまな反響を呼び、古くから作品に親しんでいる視聴者からは厳しい批判が多く寄せられている[17]。その事態を憂慮した中国国家広播電視電影総局は、2004年に「紅色経典の改編テレビドラマに関する問題に真剣に取り組むことについての通知」〈関於認真対待紅色経典改編電視劇有関問題的通知〉を出し、改編作に「原作を誤読し、観衆を誤った方向に導き、市場を誤解させる」現象がみられると指摘した。以後、関係機関の審査を通さなければ、“紅色経典”の改編ドラマを制作することができなくなった。

---

15 王春艶「“紅色経典”研究総述」『海南師範学院学報』社科版、2006年1月（いま『中国現代、当代文学研究』、2006年8月所収）。

16 陳衝「雑弾“紅色経典”」『文学自由談』2004年第1期。

17 詳しくは、谷美喜子「現代によみがえる革命模範劇」『火輪』第17号、『火輪』発行の会、2005年3月。

しかし、そのような状況にありながらも、“紅色経典”の作品は次々に改編されつづけている。テレビドラマという消費を前提とした媒体のなかで、今後、革命と娯楽はどのように結びついていくのだろうか。“紅色経典”改編ブームのなかのテレビドラマ「鉄道遊撃隊」の改編には、連環画や映画など過去の改編作品が大きな影響を与えている[(18)]。

『鉄道遊撃隊』と同じく、山東省を舞台にした中国の小説に『水滸伝』がある。梁山泊に集う 108 人の豪傑たちの活躍を描いた『水滸伝』は、さまざまな文芸形式の種々のエピソードが集大成された小説である。『鉄道遊撃隊』をはじめ、“紅色経典”とよばれる中国の共産党による革命を題材とした作品は、いま改編という名のもと、新たな再解釈が次々に施されている。プロパガンダとレッテル貼りをされる文学作品もやはり、長い目で見れば、物語がのちに改編されて新たな解釈が与えられ、やがてひとつの物語に集大成されてゆく、中国文学の大きな流れのなかにあるのではなかろうか。

今後、『鉄道遊撃隊』という物語がどのように変遷していくのだろうか。これからも注目してゆきたい。

---

18 詳しくは、拙稿「対流するイメージ:“紅色経典”『鉄道遊撃隊』を例として」『火輪』第 23 号、『火輪』発行の会、2008 年。